
歌が上手な転校生

臨奈

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

歌が上手な転校生

【Nコード】

N6785U

【作者名】

臨奈

【あらすじ】

ボンゴレファミリー10代目ボスが通う並盛中に転校生がやってきた！！それは歌が上手な、黄色い髪の子！この二人が次々に呼び込む嵐をツナはどうするのか！？

鏡音来る！！（前書き）

自分が大好きな鏡音姉弟とREBORN！をコラボしてみました
楽しんでいただけるとなによりですww

では。。どうぞーノノ

鏡音来る！！

「おはよう、ツナくん！」

「京子ちゃん・・・！おはよう！」

「知ってる？？今日ね・・・」

キンコーンカーンコーン

京子の言葉をさえぎるようにチャイムが鳴った。

「あ・・・京子ちゃん、なに？」

「・・・うつん！なんでもない！お楽しみの方がいいもんね」

「??？」

俺は沢田綱吉。

普段はダメダメな俺だけど、実は巨大マフィア、ボンゴレファミリーの10代目ボス候補だ。
なりたくないけど・・・

今は珍しく平和な日々を送ってる。

さっきの京子ちゃんの言いかけがきになるけど・・・

「おゝい、席つけゝ！今日はな・・・あれ?？」

先生、なにドアの方気にしてんだ??

「おかしいなゝ・・・・・・・・ぶっ!!!!」

!? 先生!?

なに今ぶつかったの!?

「いったあゝ・・・・・・・・」

その声に教室が一気にざわついた。

「!???」

なんだあの黄色い髪の子!?

「あ、あの子かなあ・・・転校生!!」

「転校生!? 京子ちゃん、ホント!？」

「でももう一人いたはず・・・・・・・・あ!」

京子ちゃんの目線の先を見てみた。

え・・・!? また黄色い髪の・・・・・・・・男の子だ!!

ドアの近くに少し癖のついた黄色い髪を後ろでキュッと結んだ男の子がスラリとたっていた。

その瞬間教室の女子が一斉に顔を赤らめた。

「こら鏡音！！遅刻したうえに教室にダイブするな！！」

「すいません〜！」

もう一人の女の子は黄色い髪のをきをピンでとめていた。
よくみるとかわいい・・・
今度は男子たちがそのこに注目してた。

「俺ダイブしてねえし・・・」

男の子の方が口を開いた。
ツナはこう思った。

「きれいな声・・・」

「え??？」

俺が今思ったこと・・・

横にはボーっとした京子ちゃんがいた
京子ちゃんが言ったのか・・・

俺はちよつとムツとなった。

「え〜・・・転校生だ！自己紹介してもらっ！」

「えっと・・・鏡音リンですっ！！」

「レンです・・・」

「双子です！！よろしく願いします！！」

みんなは大盛り上がりだった・・・

*

俺たちの教室は今までにないほど集まっていた。

学校一人気な京子ちゃんや、爽やかで女子に人気な山本、
獄寺君に興味を持ってる女子も
少ない。

そして鏡音姉弟・・・

2人は一日たたないうちに学校中の注目を集めた。

よりによって俺の後ろが鏡音弟・・・！
休み時間は女子がうるさいし・・・！！

「リンちゃん！」

「あ、京子ちゃん！！！」

あの二人はさっそく仲良くなって・・・
それに比べて俺は・・・

レンの方をチラッとみるとイヤホンで音楽を聴いていた。
長いまつげを伏せて、その隙間から緑色の瞳が見えていた。
女子が騒ぐのも無理ない・・・

「てめえ・・・」

獄寺君なんでそんな睨んでんの！？

レンは緑色の瞳だけを獄寺の方に向けた。

「おまえあれか？！どつかのファミリーのスパイか！！イタリアとかから来て10代目を・・・」

「獄寺君っ！！！！」

レンがツナに目を向けた。

「あ・・・ご・・・ごめんね！！急に变なことを！！」

「別に・・・面白いこと言うね、獄寺君」

レンは少し笑って言った。

「もしかして・・・もう名前覚えたの！？」

「覚えたよ。君、沢田君だろ？」

「すごいねっ！！あ、ツナでいいよ！！」

「じゃあ・・・ツナの気になる子は笹川さんかな・・・？」

「なっ！！！！／／／／」

レンはくすくすと笑った。

(「このやろ……!10代目と仲良くしゃがって!!」)

「あ、ツナくんたち!!レン君と仲良くなったのかな!？」

「京子ちゃん、ツナくんって??」

「今レン君と話してる子だよ!」

「……横の、銀髪の子は??」

「……ああ!獄寺君だよ!怖そうだけどホントはいい人だよ!」

「そうなんだ……」

リンは獄寺をじっと見つめていた。

「獄寺……君……」

この鏡音姉弟は並盛中に嵐をよびこんだ。。。。

鏡音来る！！（後書き）

最後まで読んでくださってありがとうございます
がんばって更新していきます！！

次回もよろしくおねがいしますw

雲雀来る！！（前書き）

2回目でございますw w

アクセス沢山でびっくりしました

本当に、ありがとうございますw w

さて、今回はリンが主役ですw w

どうぞ

雲雀来る！！

放課後、リンは学校中を駆け回っていた。

（誰もいないところ・・・）

そして一つの部屋が目に入った。

「ほわあ・・・綺麗な部屋だなあ・・・！」

リンはあたりを見回して誰もいないもを確認すると、大きく息を吸った。

優しい声で歌いだしたそのとき。。。

「何してるの・・・？」

「！！！！！」

「君か、黄色い髪の転校生・・・その色は校則違反だよ」

「・・・あつ、この、これは、地毛で・・・」

リンは目の前にいる学ラン姿の男をぼーっとみた。

「し・・・失礼しましたあ！！！！！」

そう叫ぶと全速力で走り去ってしまった。

廊下をかけながらリンは顔を真っ赤にしていた。

（この制服学ランじゃないでしょ！？？つか・・・あの人がッ
コよすぎでしょ！？？）

ドン

頭がぐちゃぐちゃのまま走ってたらか誰かにぶつかってしまった。

「ったゝ・・・・・・・・あ。てめっ・・・・・・・・!!」

「あ」

（怖そうな人だけど実はいい人、髪の毛の色が興味深くて、お友達になってみたい獄寺君だ！）

「おまえレンってやつ・・・・・・・・どうでもいい！！10代目見なかったか?!」

「10代目・・・・??」

「あゝ．．．くそ！！やっぱいい！！」

そう言い捨てると走り去ってしまった。

「10代目って誰???」

リンは誰もいなくなった廊下で呟いた。

(つかっ！！さっきの学ラン王子の名前っ．．．!!)

「おい」

少し低めの声がリンを呼んだ。

「レン！！」

「何してんだよ。また歌うところ探しか？」

「．．．！！悪いかっ！！」

「別に。好きにしろ。」

少し笑って言ったレンをびくりしてリンは見つめた。

「どっ．．．どうしたの!?!」

「まあ、俺もいいことあったんだよ。」

「ツナくん!？」

「さあな」

やっぱりレンは笑ってた。

リンも心の底から笑った。。

この2人にとってに友達ができるというのはすごく、何よりもうれしいことだった。

今までいなかったから……

「あいつらだな。例の転校生は。姉の方は運動神経抜群のようだな。弟の観察力と記憶力も半端じゃない……」

木陰に隠れた1人の赤ん坊がニツと笑った。

「面白くなりそうだ。」

雲雀来る！！（後書き）

ありがとうございました

読んでくださった方に心から感謝です

また、次回もよろしくお願いします

超直感来る！！（前書き）

あ、タイトル意味不明？？
気にしたらいけませんよ

今回も来てくださってありがとうございます
ぜひ、よんで行ってくださいww

超直感来る！！

「レンたちもう放課後はいなかったな・・・」

そう呟きながらツナは家に帰っていた。

「ツナ」

横から声がとんできてビックリした。

「リボーン！！」

「相変わらずアホ面だな」

「うるさいな！！っていうかまた学校についてきてたんじゃないだらうな！？」

「そんなことはどうでもいいだろ。おまえ、これは肌身離さず付けてろって言ったろ。」

リボーンがボンゴレリングを差し出してきた。

「あ・・・！！隠してたのに！なんでつけなきゃいけないんだよ！！」

「そんなの決まってるだろ。お前はもうすぐマフィアのボスになるんだぞ？」

「んなっ！？なりたくないってば!!」

「んなこと言われたって9代目からもう・・・」

「ツナ・・・？」

向こうのほうから声が聞こえてきてその声にツナは冷や汗をかいた。

「レン・・・!!」

レンは歩いてた動きが止まったまま、ビククリした表情だった。

「きいてた・・・？」

ツナはおそろおそろ聞いた。

「きいてた・・・」

レンは真顔で答えた。

「じょ、冗談に決まってるだろ!!本気にしてないでしょ!？」

「ずいぶん仲良くなってるじゃねえか。」

リボーンが小さくつぶやいた。

「え？」

「そうだ、このダメツナは大マフィアのボスになるんだぞ。」

ツナは少しハッとした。

（リボーン・・・わざと言った・・・！？）

「・・・・・・・・」

レンはポカンとしていた。

「そんなこといったって信じるわけないだろ！？」

ツナがリボーンに小さく言った。

「信じられないけど・・・」

レンが口を開いた。

「ツナはなんか特別な気がしてた。」

リボーンがニッと笑った。

「おいツナ」

「は？」

「こいつも超直感もってるぞ」

「はあ!？」

超直感来る！！（後書き）

最後までありがとうございましたあ

こんかいちよつと短めww

まさかの展開ww

まさかのブラットオブボンゴレwww

このあとどうなるんでしょうな
次回もよろしく願いしますww

くボングレの血来る！ーく（前書き）

遅れてスイマセンく>く；；；

そして題名また意味わかんなくてごめんなさーい（笑）

では、楽しんでいってください

くボンゴレの血来る!!」

「な、何言ってんだよりボーン!!」

「言った通りだぞ」

「？」

レンは2人についていけない。

(レンが超直感!?!は!?!超直感はボンゴレの血……は!?!?)

「俺も少し調べたんだ。証拠はねえが、つじつまは合ってる」

「なんだよ?!早く言えよ!!」

「まあこんなところじゃなんだ。ツナんちいくぞ」

「俺んちかよ?!」

レンは黙って2人について行った。
行ったほうがいい。

そう……直感していた。

「とりあえずこんな感じた」

ツナは巨大マフィア、ボンゴレファミリーの10代目（候補）だということ、守護者のことすべてを話した。

レンはたいしてビックリしてなかった。

「お、驚いた・・・？」

ツナがおそろおそろ聞いてみた。

「かつこいいじゃん」

「んなつ！？」

予想外の答えにツナの表情はマヌケになった。

「こつからだぞ。よく聞けよ鏡音レン。」

レンとツナが真顔になった。

「今話したボンゴレファミリーのボスは、もともと2つの一族がその座についていたんだ。

だがある事件のせいで、そのうちの1つの一族が壊滅した。そして今残っているのがツナ側の一族ってわけだ。」

（俺側・・・？）

「俺が調べたところ・・・レンはその壊滅した一族の唯一の子孫だ。」

場の空気が、一瞬冷めた。

「で、でもリンは・・・？」

レンは動揺を隠しきれてなかった。

「お前らは双子だろ？だったらリンも、子孫だ。だがレンのほうじゃ覚醒は早いな。」

「超直感・・・。」

「そうだぞ。だからレンにもボンゴレの血が流れてるんだ。」

「知らなかった・・・！！！！何も・・・！！！！」

レンが俯いてしまった。

「レ、レン！！」

「そりゃ、まだ子孫がいたと知れたら戦いの火種になるからな。」

「！！！！」

「でも大丈夫だぞ。いまのボスはボスの座に執着心がまるでないからな。」

「あつ！当たり前だろ！！？」

「このこと、リンにも話さなきゃ。」

「そ、そうだね。オレも行くよ！」

*

「ここに・・・いるの？」

レンたちが来ているのは真っ青な海が広がる静かな公園だった。

「リンはいつもここで・・・。」

どこからか歌声が聞こえてきた。

「ホラ」

リンだ。

透き通るような歌声だけど、力強くてここまでよく聞こえる。

「キレイ・・・」

ツナがぼーっとしていると、

レンもそれに合わせて歌い始めた。

そしてリンのほうにゆっくり歩き始めた。

それに気づいたリンはレンの声にのっかり、2人で綺麗な旋律を奏

で始めた。

そこだけ空気が色が違うようだった。

美しい、綺麗、

では表現しきれなかった。

いままで普通に暮らしてきた2人・・・

ボンゴレの事実を知ってしまったら・・・

もういつも過ごしてたような日々は戻らないだろう・・・

歌が上手な転校生は、

マフィアでした。

くボンゴレの血来る！ーく（後書き）

ふう
w
w

最後まで読んでいただいて、ありがとうございました

次回も、ぜひぜひよろしく願います

く山本来る！く（前書き）

お久しぶりですく

1ページに来ててびっくりです（笑）

ありがとうございますー！！

では、どつぞ〜w

「山本来る！」

「なーなー、山本！お前のクラスにまた転校生来たんだろ！？」

「あゝ、まあな！」

山本は放課後、グラウンドで部活中だった。そこに野球部の男子が1人、話しかけてきた。

「学校中で噂だぞ！山本とどっちがモテてるか！！」

「ん？俺？ハハッ！！なんかおもしれーのな！」

（わかってねえだろこいつ・・・）

山本は野球部で人望が厚く、リーダーシップがある。その上底抜けに明るく、爽やかだ。運動神経もかなり良くて背も高い。

その性格やルックスで、女子には結構モテモテだった。

今日も部活を見に来てる女子は結構いた。

「山本く〜ん！！！！！」

女子が精一杯手を振ってきたから山本は笑顔で返した。

「や〜！応援されるってのはやっぱりいいもんだなっ！」

（こいつどこまで天然なんだ・・・！？）

＊

公園にはリン、レン、ツナ、リボーンの4人がいた。

「リンちゃん・・・大丈夫？」

ツナは心配そうにのぞきこんだ。

「ビックリしたよな・・・」

レンも心配そうだ。

「・・・っ・・・へへっ！」

「「え？」」

リンが急に照れくさそうに笑いだした。

「なんかカッコいいじゃんそーゆーの！！」

「んなっ!？」

（この子山本並じゃない!？）

「それに綱吉君や、同じクラスの獄寺君とか山田君とか・・・いっぱいいるんでしょう?？」

「山本ね！！あと京子ちゃんのお兄さんや風紀委員の雲雀さん！！」

リンは「風紀」が頭の中にぼんやり浮かんだがなんだか思い出せなかった・・・

「あとつぜえ牛ガキもいるぞ」

「リボンちゃんはそんなかわいい顔して世界一の殺し屋なんだよね！！」

「ああ、そうだぞ。」

「なんかこれから楽しくなりそうだねー！！」

（リン・・・）

レンだけは、まだ心配そうにしていた。

*

「リン・・・ショックだったんだろ？無理すんなよ」

レンは家に帰ってからリンに言った。

「・・・何言ってるの！！楽しそうじゃん！！」

「マフィアの意味ぐらいわかるだろ？俺たちは今まで一般人だったんだ。驚かないほうが・・・」

「楽しいって思わなきゃ人生なんか真っ暗だよ!!!!!!!!!!!!!!」

リンが叫んだ。

「リン……」

リンが我に返ったように表情が落ち込んだ。

「ゴメン……でも、そう思って生きるって決めたの。」

リンは作り笑いをして言った。

「そうだな……。俺がいるから……。大丈夫だ!!」

レンはそう言ってリンの頭を優しくなでた。

「うん……!」

*

次の日も学校はいつも通り終わった。

リンはふと窓の外を見た。

そこには野球の練習をしている野球部の姿があった。

「リン〜! 帰るぞ〜!」

「レン!!! 野球していきたい!!!」

「はあ!?!」

「リンちゃん、野球できるの?」

「京子ちゃん!! 大好きなの!! 野球部の人知らない?」

「山本君が・・・あ、もう行っちゃったかな?」

「山本・・・!!?!? ありがとう!」

そう言うものすごいスピードで走って行ってしまった。

「ったく・・・あいつには追いつけねえな・・・」

レンがあきれた顔で言った。

「やーまもーとくーん!!!!!!!!!!!!!!」

リンは大声で叫んで山本を呼んだ。

「何? あいつ!」

「あ! 転校生じゃない!」

「気安い奴」

女子の痛い視線なんてお構いなしだ。

「なんだ?」

山本がこつちを向いた。

「野球やらせてえゝ!!!!!!!!!!!!!!」

リンが発した言葉はみんなの予想外で周りは唖然とした。

「ハハッ！女子でもいるんだな！！いいぜ！！」

「おいしいのかよ！！山本！！」

「あの子たぶん相当すごいぜ！」

「なんでそんなことわかるんだよ！？女子だぞ！？」

「
な
ん
と
な
く
な
っ
！
」

(ダメだこいつ・・・; ;)

いつの間にかジャージに着替えたリンがグラウンドに入ってきていた。

ゝ山本来る！ゝ（後書き）

まさかのリンが野球参加！？

今回はドキドキハラハラだあゝ！！

読んでくださってありがとうございました
次回もよろしく願いしますw

く初恋来る！ーく（前書き）

リンが野球やり始めた〜；；；

はい、ゝ、こんにちはw

毎度ありがとうございますゝw<

リンは右脳派なのです（ワラ

ではどづづ〜w w

く初恋来る！！く

「ははっ！やる気満々ななっ！！」

「当然よ！！」

野球のユニフォームを着た爽やかな少年と、強気で好奇心にあふれた目をしている美少女の話している姿はギャラリーの注目を一気に集めた。

（俺らはもはや影だ・・・）
その他野球部員の思いww

「あのかわいい子転校生だろ！？野球できんのかよ！？」

「山本くん！！！！」

歓声が飛び交っていた。。

「リンちゃん！！」

「何やってんだよ。。。つたく！！」

レンや京子やツナも来ていた。ツナが来てればもちろん獄寺も。

「んじゃ！やるか！」

「お互いの、お手並み拝見ね」

山本がピッチャーだ。

リンはバッター。

2人の気迫に周りのまれた。

「あの二人・・・本気だぜ・・・」

山本が投げたボールはすさまじい速さでリンの方へ向かった。

「レン！！大丈夫なのリン・・・！！」

「まあ野球は・・・」

キンッ

ボールが高く、飛んだ。

「いんだけどさ、人の目を気にしてほしいよね。」

慣れ切ったレンの口調と、なによりもリンが山本の速球を打ち返したのに口を開けて驚いていた。

「ちっ」

山本は悔しがっているようだった。

高く上がったボールを見届けるとリンは猛スピードで走りだした。

「早っ・・・！！！！！！」

周りが啞然とした。

そしてリンは2塁に滑り込んでセーフ。。。。

「やっぱり山本君の球をホームランはむりかあゝ！！」

「やっぱりなっ！」

「山本の勘当たっちゃった・・・・」

「すげえよあの子！！」

歓声が沸き起こった。

「ははっ！おもしれーやつがきたのな！！」

「君たち……騒がしいよ……」

静かな声がギャラリ―全員をこわばらせた。。。。

「ひつ、雲雀さん！！！！」

（しまった！！風紀委員を怒らせた！！）

（殺されるぞ・・・！！！！）

「がっ！学ラン王子……！！！！！！！！！！！！！！」

リンが叫んで周りが固まった。

「あの子何物……!？」

「やべえぞ!？」

周りの厳しい表情などリンには見えていなかった。

リンが雲雀の方に走って行った。

「また君？いい加減にしてくれるかな。僕の眠りを妨げるとどうなるか知っているかい？」

リンはボーっとしてたがやがて口を開いた。

「好きですっ！！」

「え？」

「あ？？」

「！？」

「え」

周りがひどく冷え切った空気になった。

ゝ初恋来る！！ゝ（後書き）

言っちゃたよリンゝw w

（作者的には超おもしろいw w）

さて次回・・・w

どうなるんでしょうねゝ

読んでくださってどうもでしたゝ

アリヴェデルチw

く黒レン来る!?? (前書き)

前回、、、言っちゃいましたね (笑)

つつか、、、このあとの展開どうしょ www

リクエストも受け付けますヨ (笑)

注意!!!!

今回、レンのキャラが変わります!レンのイメージを崩したくない方は、、、

遠慮した方がいいかな・・・?

大丈夫な方は、、、どうぞノノ

く黒レン来る!??

信じられないほど人が密集している場所は、、、、

信じられないほど静かだった。

「あの子なんて言った・・・・・・・・!?!」

「なんも言っていない・・・・・・・・!!?と思いたい・・・・・・・・」

「ただもんじゃねえぞ!?!」

次第にざわついてきた。

「・・・・・・・・はっ」

リンは我に返ったように雲雀から視線をそらした。

(やっべ・・・・・・・・!やっつっべ!!!!何言ってるの!?!あれ?なんて言っただ!?!)

見るからにおろおろしてる。

しかし雲雀はそんなリンを表情ひとつ変えず上から視線で見下ろしていた。

「君たちに付き合ってる暇はないんだ。さっさと戻らないと、咬み殺すよ。」

「みんな戻れー!!!!!!」

ギャラリーは全員散ってしまった。

雲雀も校舎の中に戻っていった。

残ったのは、レン、ツナ、京子、山本。

そこにKYな自称右腕の獄寺がやってきた。

「10代目ー!!!!!!アレ?どうかしたんスか?」

(超空気読めてねえー!!!!!!)

レンがリンに近づいた。

「……リン……??」

「うつ……」

リンがしゃがみこんだと思ったら上を向いて大声で叫んだ。

「ふられたあああー!!!!!!!!!!!!」

「あの子なんかすげーな……!」

山本はもう感心気味だった。

「なんだあいつ・・・？」

「あれ・・・ふったって言うのかな・・・？いつもの雲雀さんじゃん？」

「そうだよね・・・でもリンちゃん何も知らないと思う・・・」

「だよね・・・」

＊

「えっ！？そうなの！？」

さっき大声で半泣きで叫んでたリンの面影はどこにもない様子だった・・・。

「そうだよ！雲雀さんはみんなにそう・・・ってかああいう性格なの！群れるのが嫌いな・・・」

「っていうか雲雀が好きって・・・お前大丈夫か？」

「うーん・・・私すぐ右脳で動くから自分の動きに考えがついていかないの・・・」

（（ある意味危険だぞこいつ・・・））

「リンは昔からそうだ。でも今回みたいなのはないな。。。。だいたい怖いくせに乱暴なガキにケンカふっかけて勝って帰ってきたり、やったこともないサーフィン一瞬でやったり、いいことばっかだ

ったから。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

一同、ツツこみも忘れてしまった。

「雲雀さんかぁ、ひ、び、り、さん」

（ダメだ・・・・・・・・）

「リンも初恋か」

リンが真っ赤になった。

「はっ・・・・・・・・!!」

「ふふっ、リンちゃんかわいっ!」

「雲雀はむりだぞ・・・・・・・・」

みんなで話していたら教室のドアがバーンと大きな音をたてた。

「ツナさぁん!!!!!!」

「ハルちゃん!」

「げっ、ハル!!なんで学校来てんだよ!!」

「だって、家に行ってもツナさんいないんですもん!!」

「だからつてくるな y」

「はひっ！その黄色い毛髪の美少年少女は . . . ! ? もしかして転校生さんですかっ ! ! ? ?」

「無視すん n」

「そうだよ。レン君とリンちゃん！双子なの ! !」

「」

「はひ . . . ! ! ハルですよろしく願いしますねっ !」

ハルがレンとリンの近くに行つてあいさつをした。

そしたらレンがしばらくハルを見つめていた。

「はひ？ハルの力才になんかついてますか？」

するとレンがハルの髪に触れた。

「かわいいね」

転校してきてみたことのないレンだった。
立っているだけで注目を集める容姿なのに、さらに挑発的な目でハルを見上げた。

「・・・・・・・・っ!!」

(だめですっ! ツナさんというのがいるというのに!!)

ハルが一気に赤面した。

周りのツナたちまでもがレンの様子にくぎづけだった。

「あゝ、レンのスイッチ入ったねw」

「「「スイッチ?」」」

「こりゃゝ厄介だねゝゝハルちゃん」

く黒レン来る!?? (後書き)

レンが・・・w w

ちよいと黒に染まった(笑)

黒くするの楽しいですね(笑) w w w

では、次回もよろしくお願いします

く特訓来る!?? (前書き)

レンもなんだかね・・・w w

今回も来てくださってありがとうございます

みなさんが読んでくれることで私のパワーがUPしますw)(?w

では、、どうぞw

く特訓来る!??

「ハルが好き!?」

「たぶんね」

朝早くからいつものツナ、京子、獄寺、山本、そしてリンが教室で話していた。

レンはいない。。。

昨日のレンのハルに対する様子は……………
すごかった……………

「レンってあんなに変わっちゃうのか……………」

「照れるのと反動でなんか挑発的になるんだよね。。ハルちゃん
かわいいから」

「まったく、双子は2人そろって忙しい奴だな!雲雀にあのアホ女
とは……………!」

「双子だと好きな人ができるタイミングも一緒なのかな?」

「雲雀さん……………下の名前なんていうの!?」

「えーっと……………?……………」

「なんでしたっけ……………?10代目……………」

「そついえばあいつの下の名前聞いたことないな！」

「でも（ある意味）有名だし。。。他の人に聞いてみればいいよ！」

「えゝ・・・・・・・・！守護者なのに知らないのゝ！？」

「あつ！そう言えば獄寺君たちに・・・・・・・・」

「大丈夫つす10代目！」

「小僧から聞いたぜ！」

「リ、リボーンから！？」

「あつ！！そつだ！今日リボーンちゃんと約束があるんだつた！！」

「んな！？リボーンのやつなにを・・・・・・・・！」

「なんかせんりよくとか・・・・・・・・？」

「「戦力！！؟؟」」

「あいつゝ！！！」

ガラッ

「あー！！レン！！！」

「おはよう鏡音君!!」

「おはよ」

レンから異常に色気(?)がでてた……

「まだハルを見たときの雰囲気だ……」

「今日はヤバそうだな……」

＊

「ねえねえ鏡音くん!!ここ教えて!!」

「いいよ」

(きゃ〜!!!!!!／／／／)

ツ(なんかもうレンが女たらしっぽく……)

獄(俺聞かれたことねえ……)

今日一日学校ではこんな感じのレンだった。

「んで???リボンちゃん！何するの!?!」

*

「まあな。レンよりお前の方が運動神経は上だから手っ取り早いんだ。」

「??」

「これに着替えて来い」

「道着……?」

「特訓だぞ」

リボンが拳銃を片手にニツと笑った。

*

レンが家に帰ったら家の前に小包が置いてあった。

（なんだ……?）

「……………!?!?!?!やばくねコレ!?!」

く特訓来る!?? (後書き)

今回ちょっと短めかな・・・?

レンが危ういものをもらったみたいですね。。。w
リボーンが動き始めた!!

今後のリン&雲雀、レン&ハルの展開もお楽しみに!

では!最後まで読んでくださってありがとうございました!

く双子の才能来る！ーく（前書き）

さあく、く、レンに届けられたものはなんだあ！？

リンとリボーンはなにしてるー！？

いろいろ気になりますww

え、気にしねえって？そんなこといわずにく（笑）く　よくやるパ
ターンww

ではく、どうぞーいw

「双子の才能来る！！」

「やっぱ飲み込み早いな。完璧に近いぞ。」

「やったあ！！武道ってあんまやったことなかったけど、楽しいね！！！」

「じゃあ形はOKだから力をあげろ。」

「力？」

「ああ。パンチやキックを強くしろ。だれも敵わないくらいな・・・」

「オツケー 楽しー！」

「じゃあ後は自主練だ。俺は他にやることがあるからな。1週間後にはそのサンドバック粉々にできるようにしとけよ。」

「なんか燃えるねー！！よっしゃ、わかった！！！」

*

「ったくりボーン！どこいったんだよ！リンになにさせるんだよー！」

（オレんちの道場貸してって言われたけど・・・秘密って約束だも

んなっ！)

ひそかに思う山本だった。。。

『お前の役目はこれだ。しっかり使えるようになれよ。俺も直々に特訓してやる。待ってる。リボーン』

「役目ってなんだよ・・・！？なんで拳銃はいつてんだ!？」

(これもマフィアだからか・・・?)

ピンポーン

「・・・リボーンか!？」

「ちやおつす。」

「おい!・・・これどういうことだ!？」

レンが包みに入ったままの拳銃を指差した。

「なんだ？まだ試し打ちもしてなかったのか？」

「民家だぞ!!どこでしろっていつんだよ!?!」

「まあそれもそうだな。よし、それ持ってついてこい。」

「持つの!?俺が!?!」

「他に誰が持つんだ。」

「ちょっと待てよ...!」

レンはあわてて拳銃を持って服に隠すとリボーンにあたふたとい
て行った。

「お前の持つてるのはまだオートマチックのベレッタM92だ。」

（べれっ...?）

「そのうちなんでも使えるように特訓するからな。」

「ついたぞ。」

「!?!」

そこには遠くに的がずらりと並んでいる黒い部屋だった。

「俺はよくここで腕磨きする。教えたのはお前だけだぞ。」

「俺...だけ...?」

「俺が目を付けたんだ。お前は相当スナイパーの素質がありそうだ

からな。」

「スナイパー！？？」

「まあとりあえず撃ってみろ。使い方はわかるはずだ。」

「！！！！」

レンは「わかるはず」というリボンの言葉に一瞬表情を曇らせたが、拳銃を上にあげた。

的に向けて狙いを定めた。

（さすがだな。姿勢も完璧だ。）

バンッ！！！！！！

的の右端にあたっていた。

「最初はこんなもんだ。あたる方がすげーぞ。」

レンは拳銃を見つめていた。

それを見抜いたリボンが言った。

「ここでなら好きなだけ撃っていいからな。でも拳銃はここに置いていけ。まだ撃っていいのはここだけだ。」

「わかった。」

レンの目が輝いているのをリボーンは見抜いてニッと笑った。

*

「まったく、もうリボーンのやつ！」

「いいじゃないスカ10代目!!!リボーンさんのことだから何か考
えてるんですよ!」

「いつもロクなことにならない・・・!」

「しかしあの双子がボスの末裔とはな・・・」

「俺も驚いたぜ・・・」

「・・・・・・・・」

少しの間公園で話していた3人の沈黙が続いた。。。。

「あ、ボス」

「!!!クローム!!!」

「なにしてんだ??こんなところで!」

「犬に買い物頼まれて・・・。」

クロームがメモを見せた。

チョコ

ガム

ガム

ガム

ガム

(これってただのパシリじゃあ・・・；；)

「そっいえばボス・・・双子の子が・・・？」

「あ！もつりボーンに聞いたかな？そう、転校してきた。」

「黒曜中にもなんか・・・。」

「え？黒曜中？」

「黄色の髪の子を知らないか？って聞かれた・・・。」

「え？」

「誰だ??」

「調べてみますか！10代目！」

く双子の才能来る！ーく（後書き）

おっと、新キャラのにおい・・・ww

楽しみにしてくださいねー

では寝ます（笑）

読んでくださってありがとうございましたあーノノ

く来る！く（前書き）

ぱっぱぱん

記念！！10話めですっw

10話めの記念（？）に新キャラ登場ですっw w

だれかな？？w w

にしましたよw w

では、どうぞw

く来る！！く

「それにしても・・・誰だろう？リンとレンにこと聞いた人・・・」

「まさかもうファミリーにばれたんじゃ・・・！！」

「ん？なんかヤベーのか？？」

「このノー天気バカ！！火種になるってリボンさんから聞いただろっ！！」

「ん？ああ！！そうだったかな？」

しかしこのときツナはあまり危機感を感じていなかった。

そのころレン達は。。。。。

「野球部入りたいな・・・」

「やめとけて。また騒ぎ起こすだろ？」

「あ、でも騒ぎ起こしたら雲雀さんが来る・・・」

リンの顔が明るくなった。

「あのなあ……!!」

言い合いしてる2人に人影が忍び寄っていた……

リンが肩をポンと叩かれた……瞬間リンは仰天した……。

「とりあえずあの二人ガードしといたほうがいいっすかね？」

「いや……うん……あ……どうしよう……」

「………ナク……ん！」

遠くから聞こえる声にツナが耳を傾けた。

「ツ……ナク……ん!!!!」

「リン!？」

猛スピードでリンが走ってきた。

その後ろには緑色の髪をした女の子が走ってきていた。
その横にはレンも……。

「ツナ君助けて〜!!!あのひと・・・あ」

「リン!」

緑色の髪の子がリンをよんだ。
よく見たら黒曜中の制服だ・・・

「ミク姉!!!!髪の毛・・・!!」

「ミク?」

「ミク姉髪の手切ったの!」

「はぁ・・・疲れた・・・あんた相変わらず速いわ・・・!このお
面でちよつとおどかしたただけなのにそのあと一瞬で声届かないとこ
ろまで走って行っちゃうんだもん。。。」

「リンは一回混乱するときかないから・・・」

「あの、黒曜中の人ですか・・・?」

ツナがおそろおそろ聞いた。

「え?」

リンとレンが声をそろえて言ったと思ったらミクを連れてコソコソ
話し始めた。

「中ってどういうことだよ!? ミク姉16だろ!？」

「やあ〜!事情があるんだって!! 今から沢田君たちにもに話すから〜」

「ツナにも・・・? 達って・・・ 獄寺君や山本君もか？」

「そうそう。。 中学に入るために髪の毛切ってショートにしたんだから〜」

「関係なくね？」

「おい!! 何コソコソしてんだよ!!」

獄寺が呼びかけた。

するとミクが小走りでこっちに来た。

「いや〜、スイマセン! 申し遅れました!」

(こいつの髪の毛もすげーのな・・・)

「このたびイタリアから日本に緊急派遣されました!! ボンゴレ門外顧問の、初音ミクです!!」

「
「
「門外顧問」！！！！！！！！
「
「

く 来る！ーく（後書き）

あららw w

まさかのミク門外顧問だわ（笑）

なんかボーカロイド集結しそう・・・w w

リンやレンとはどーゆう関係なのでしょううかw w

次回をお楽しみにw

読んでくださってありがとうございますたー

く過去来る！ーく（前書き）

まさかのミクが門外顧問（笑）

あ、べつにボーカロイド集結させるつもりではありませんよ？？w

ミクは出したかったですw

まあみなさんに集結してほしいと言われたら・・・ww

はい、おいという

どうぞ

く過去来る！！く

「門外・・・顧問！？」

「はいっ！！9代目の指令でイタリアからはるばるやってきましたっ！」

緑色の髪の子、ミクはおでこに手を当てて敬礼した。

「9代目の指令・・・？なんでだ？」

「ハッ！鏡音姉弟のガードですっ！！」

「「え？」」「」

「俺が9代目に教えたんだ。」

「リボーン！！」

「リボーンさん！！」

「物的証拠が見つかってしまったんだな。」

「物的？」

「リンが持ってるぞ」

「わっ、私!??」

「ペンダントだ。」

「え?そんなのしてる?」

「リボンくん・・・よくわかったね。前にこれは肌身離さず付けてる、でも決して見えないように隠せ、って言われてたから・・・いつもしまっておいたんだけど・・・」

リンが服からペンダントを出した。
それを見ると全員が目を見開いた。

「これは・・・」

「ビックリだな」

「ボンゴレの紋章だ!!!!!!」

「そうなの??」

「んで、レンも何か持ってんだろ?俺は見えないが。。。。」

「俺はこれだ。」

レンがズボンのすそをめくった。

「アンクレットか・・・」

「これもボンゴレの紋章が。。。」

「私たちこれは小さい時からずっとつけてるの。なんか、付けなきゃいけないような気がして・・・」

リボーンが口を少し結んだ。

「初音。」

「はい」

「こいつらにも話す。おまえに頼むぞ。」

「わかりました」

「・・・さて、リン、レンちょっと行きたいところがある。付き合ってくれ。」

「ああ。」

「うん？」

そこに残ったミク、ツナ、獄寺、山本は3人を見送った。

「あの・・・話すことって・・・？」

「これは・・・ボスの沢田さんだけにでもいいのですが、お二人も念のため聞いてください。」

「「？」」

「リンとレンは、私の幼馴染なんですけど、もう、かなり会ってなかったんです。2人は全然普通の生活なんかしてなかったんですよ。」

「え？」

「何も知らないまま一部の謎のマフィアに狙われてたんです。あの子たちの両親も、その関係でリンとレンが7歳のときに亡くなりました。」

「謎って・・・？」

「・・・私たちも、リンとレンの秘密を知ったのはごく最近でしたよね。それよりずっと前にもう知ってるやつらがいたんです。」

「じゃあ今もそいつらに・・・！」

「今は大丈夫です。・・・ファミリーにもいろんなタイプがあります、そのなかでリンやレンの一族は特殊で、術師系が多かったです。」

「術師系・・・？」

「平たく言えば超能力ですかね。炎の波動と一緒に生まれつきの能力があったんです。その能力で、リンたちの祖父母があのアングレットとペンダントを作って守ったんです。そしてリンたちの秘密を知るマフィアも術にかけた。それで今は安全です。しかし、そのアングレット、ペンダントは次第に力が弱まってるんです。弱まってもリンたちの両親が直せてたんですけど・・・。」

「じゃあ・・・!!」

「はい、またリンたちの正体がバレて命が狙われます。もう術師系のファミリーはリンとレンだけです。しかしなにも知らない2人では・・・」

「やばいじゃねーか・・・!!」

「はい・・・。そこで、沢田さんたちのファミリーにリンとレンを入れてほしいんです。」

「んなつ!？」

「リンとレンはもう知ってしまったからには術師系の能力を覚醒しなきゃいけないんです。」

「でも俺らにも・・・!」

「私が2人の責任を持ちます!! 沢田さんたちはもしもの時のために・・・」

「・・・」

「10代目・・・どうします?」

「んなつ!？俺!!??」

「そりゃあツナがボスだからなっ」

「でもそう言われたら・・・」

「お願いします！！！！！！」

ミクが頭を下げた。

「わ、わかりました。」

ミクの顔がパアッと明るくなった。

「ありがとうございます！！」

*

「ツナたちのファミリーに入る！！？？」

「そうだぞ。」

リボーンがリン、レンにツナたちのファミリーになるように言っていた。

「リンの抜群運動神経とレンの頭はいまのツナたちに必要だ。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「なんかよくわかんないけど・・・」

「入ってみるか？」

「うん！」

「よろしくね！！リボンくん！！」

「ああ。こっちこそな。」

（わりいが、これからお前らにはつらい日々が待ってるかもしれない・・・）

「その笑顔、忘れんなよ。」

「え？私はいつでも笑ってるよーん」

レンだけは、直感していたかもしれない・・・

これからの日々を。

く過去来る！く（後書き）

今回長いですねw w

リンとレンの秘密が明らかになりました！！

この二人の血は特別ですよw

スペシャル・ブラッド・オブ・ボンゴレw w

みたいなw（黙れw

最後まで読んでくださってありがとうございます！

次回もよろしく願いしますw

く紹介来る！ーく（前書き）

今回もリンとレンのちょっとした過去公開ですよw

あのですねー、

感想更新してあるとニヤついちゃうんです（変態じゃないですよw
だってうれしいんですもんw

原動力ですw

読んでくださる皆さんにホントに感謝します

では、

どうぞーノノ

「紹介来る！！」

「えっ！！そうなの！？」

「うん、歌を教えてくれたのはミク姉だ。」

ツナとレンは2人で歩きながらツナの家に向かっていた。

「小さい頃に俺たちに教えてくれて・・・でも、ミク姉が14になったとたん、会えなくなっただ。」

「え・・・？あ！もしかしてボンゴレの・・・」

「そうみたいだ。だから2年ぶりだったんだよ。」

「そうだったんだ・・・」

「あのさ、ツナ！」

「え？」

「俺たち、なんかこれから先、・・・うまく言えないけど、もうふつうに暮らせない気がするんだ！リンは・・・もう親の一件があつていつも元気だけど、無理してる時もあるんだ。」

「じゃあ今も・・・？」

「いや、ツナたちのファミリーに入ることとはすごく喜んでる。けど、

俺は、．．入りたくないわけじゃないけど、なんか．．．」

俯きかけたレンをみてツナが口を開いた。

「俺さ．．．ついこの間、死にかけたんだ。」

「え．．．．？」

「俺ら、今のみんなの未来を守るために戦ったんだ。死にかけたし、ダメダメな俺が人類とか、未来とか．．．そんな大きなもの守れるわけがないって思ったんだ。そのときはいいことなんて一つもないって思ってた。でも死にかけたから、痛い思いしたから、守るべきものがあつたから今の俺がいると思うんだ。」

「．．．．．」

「この先どんなことがあっても、俺らのファミリーじゃ後悔するよ。うなことはないと思う。レンも、リンも、絶対今より強くなれるよ。」

ツナが言ってくれたことでレンは少し笑顔を浮かべた。

「あつ、で、でも！！ボスとかやだしつ、もう死にたくないよっ！
！？」

「．．．．ツナ、ありがとう」

レンがまっすぐツナを見て言った。

「．．．．へへっ」

ツナが照れくさそうに笑った。

「あ」

「なっ、何？？」

「遅れちゃう！」

「あっ！ヤバいリボンに怒られるー！！！！！」

「走ろう！」

＊

「おせえぞお前ら。」

「ごめん……」「すみません……」

「全員そろったな。」

（なんで俺んちに守護者全員集めるんだよ………）

「あれ？リンどうした？」

俯いて体育座りしているリンを心配そうにレンが覗き込んだ。

「雲雀がこねえっていったらずっとその調子だ。」

「「ああゝ……………」」

レンとツナが納得した。

「さて、じゃあ新ファミリーの紹介だな」

「おい！リン！！」

レンが呼んでもリンは無視した。

（めんどくせえな……………）

レンがしゃがんでリンの耳元でなにか囁いた。

そのとたん、リンがバッと立ち上った。

「鏡音リンです！！14歳！！ファミリーとかよくわかんないけど頑張りますっ！！」

いつものリンのように明るく自己紹介した。

「レンです。よろしくおねがいします。」

「ツナたち三人はもう知ってるからいいな。あとはクロームと了平、京子の兄だ。」

「京子が極限にいつも世話になってる！！！！」

「わあ〜！京子ちゃんのお兄さん！！極限によりしくお願いしますね〜」

「ああ！！よろしく頼むぞ！！」

（なんかノリあつてる・・・）

「クロームちゃん？よろしくねっ！（超可愛いんですけどw）」

「・・・よろしく・・・。」

「人見知りなんだ。でもいいやつだからな。」

ピンポン

「？誰だ？」

「俺が呼んだんだ。京子たちだぞ。」

「あ〜・・・京子ちゃんたち・・・あ！！『たち』！！？？」

「10代目！！こいつが・・・！！」

「またなのな！！」

「「おっじゃまします」」

京子とハルがはいってきた。

「ハっ、ハル!!」

ツナがあからさまに慌てていた。

「はひ？ハルの顔になんかついて……………」

レンとハルの目が合ってしまった。

「はひっ!!!!!!」

「あ」

「やば……………」

「ちっ」

「おもれーのな」

レンの目が変わった……………。

ゝ紹介来る！！ゝ（後書き）

なんかツナがボスらしくなってますねww

10年後ツナにだんだん近づいています（笑）

レンもまたスイッチ入っちゃったゝww（楽しいw

次回もまたよろしくおねがいしますゝノノ

アリヴェデルチw

く戻って来る！ーく（前書き）

さらに上行けました

超うれしくて目から汁が・・www

みなさんのおかげでございますっ

どうぞ、これからも、よろしくお願いしますー！！

さて、、レンはどうなっちゃうんでしょう？・w

く戻って来る!!」

「・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・」

目が合ってしまったレンとハルをみて静まり返ってしまった。
しかしリンとツナと山本と獄寺しか理由は知らない。

「極限にどうしたんだ?」

「あ、あのっ、・・・・・・・・ハ、ハルっ!! あっちに・・・・・・・・」

「はひっ!!」

2人ともあわてて言葉がおかしくなった。

そこに足音が聞こえてきた。

「ガハハのハッ!!!! ランボさんとうじょうだもんね!!」

「うるせえな」

ゴッ!!

「ぐびゃっ!!!!」

「ちなみにあの牛ガキが雷の守護者、ランボだぞ。」

リボーンにとつかれてのびてるランボを指して言った。

「ランボちゃん大丈夫ですか〜!？」

ハルが足元でのびてるランボをみて我に返った。

そして空気がやっと戻った。

「ランボちゃん? かわいいね!」

リンが言った。

ツナはちらつとレンを見たがもうハルを見ていなかった。

しかし、微妙に赤面していた・・・のには、ツナも気づかなかった。

「ムキー!! ランボさんおこったもんねっ!!」

ランボがリボーンに突進しようとした。。。

そこでレンがランボを優しくつかんで止めた。

「そんなに暴れるとまたのびちゃうよ?」

やっぱりレンの様子はハルを初めてみた時と同じ、、、そこだけ空気がキラキラしてるようだった・・・

「こいつ誰? ランボさんの部下にしてあげよっか?」

「そうしてもらおうかな」

レンが優しく笑った。

「レっ、レン！ー！うざいよ！？やめときな！？」

「大丈夫、レン、ああみえても子供扱うの慣れてるから。」

リンが言った。

「二人とも立ってないで座っていいぞ」

「うんっ！」

京子とハルが座ろうとした。

座ろうとしたハルの腕をレンがつかんだ。

「ハルはここ」

ハルがまた一気に赤面した。

「まあいい。座ってるハル。」

リボーンが言った。

（レンいつの間にかハルって言うてる・・・）

そのあとは特に何もなく、
ツナのうちでみんな楽しくレンとリンの歓迎会をした。

でもハルはレンの隣に座ってる間、
恥ずかしがったままだった。
。。

*

楽しい時間が終わった後は片づけ。
リンとレンは主役だったから先に帰ってもらって・・・
クロームは・・・

「犬と千種に怒られちゃうから・・・」

と言って帰ってしまった。

そして京子とハルが片づけを手伝ってくれた。

上の部屋はツナがかたずけていた。

「もっ・・・なんで俺が・・・！勝手にみんなよんだのリボーンじやないかっ！！」

「あ、ツナくん！ご苦労さまっ」

京子が食器をとりにつなの部屋に来た。

「きよ、京子ちゃん！」

「今日は楽しかったね！」

「うん！でもレンがまた・・・」

「レン君はきつとハルちゃんが好きなんだね」

「だろうね」

「でもみんな仲良くなれたし、よかったねツナ君！」

京子が満面の笑顔でいた。

「・・・うん!!」

(やっぱり京子ちゃんかわいい・・・!!)

「でもそう言えば・・・なんでリンちゃんとレン君って、転校してきたんだろうね？」

「あ・・・そう言えば・・・」

(やっぱりなんかレン達の両親とかの・・・関係してるのかな・・・?)

「おい!!帰ったぞ!!!!」

下の方から声が聞こえた。

「もしかして・・・」

ツナがビククリした。

「ゴメン京子ちゃん!!お皿、ありがとね!!」

急いで下に降りてしまった。

そして玄関にいくと・・・

「ようツナ!!久しぶりだな!!」

「父さん!!!!!!?」

く戻って来る！ーく（後書き）

レンがまた・・・（書いてる側はおもしろいです笑

家光きましたが、ゝ、なんかあったんでしょうかね？？w w

次回もよろしく願いますっ！！

読んでくださってありがとうございますたゝ

ゝ家光来る！ゝゝ（前書き）

家光登場

なゝんでだっw

来てくださってありがとうございますw

どうぞお楽しみくださいw

く家光来る!!く

「父さんく!!!????」

「よっ!久しぶりだな!!」

「あなた!!」

ツナの母親、沢田奈々が来た。

「奈々く!!!」

「あなたく!!!」

ツナは感動し合う夫婦をみて呆れた顔をした。

「ツナ君のお父さん・・・?」

「きよ、京子ちゃん!!」

「おお!!キミが笹川京子ちゃんか!ツナがいつも世話になっている!」

「いえ、こちらこそ!!」

「はひっ!ツナさんのお父さんですか!!?」

(ハルまで・・・!)

「キミは三浦ハルさんだね！ツナが世話になっている！！」

「はひっ！！そんなことないです！！ツナさんにはお世話になりっぱなしです！！」

（なんで父さん京子ちゃんとハルをしってるんだ・・・？；；）

「ハルちゃん、きつと家族水入らずで過ごしたいだろうからそろそろ帰ろうかつ！」

「そうですね！！・・・じゃあツナさん、また今度！」

「バイバイ！ツナ君！」

「う・・・うん！」

2人はツナの家をでて家に帰った。

「んで！なんで父さん急に帰ってきたんだよ！！温泉掘ってたんじやないのかよ！？母さんはもう夕飯の支度なんか始めちゃって！」

「いやゝゝ、！どうだ？ツナ！鏡音姉弟は！！」

「へ！？なんで知ってるの！？」

「俺が言っただぞ。」

「リボーン！！」

「よ、家光。久しぶりだな。」

「ああ!!しばらくだな!」

「なんでレンとリンを・・・」

「いやゝ!ビックリだな!!」

(全然ビックリしてるように見えないんだけど・・・)

「まだあの2人の正体を知ってるのは9代目と俺、ツナたちの10代目ファミリーだけだ。」

「そうなの!?」

「ああ、気をつける。明日はお前らにプレゼントがあるからな!」

「え・・・?ふれ・・・?」

「まあ楽しみにしてろ!」

*

「プレゼント?」

「うん・・・父さんが、、何なんだろう?」

「10代目のお父様帰ってきたんですね!!」

「ツナのお父さんか！久しぶりだなっ」

「ツナのお父さんって……」

「すごいのか？」

「そっか、レンとリンは知らないのか！ボンゴレの9代目直属の門外顧問だよ。」

「へえ……」

「あ、数学の宿題やってない」

「あゝ……！！！！！！！！！！」

「ま、私のはレンがなんとかしてくれるけどね」

「は？」

「ね？レン」

リンからの威圧感たっぷりのオーラがレンに向けられた。

「……ああ……」

（（この2人兄弟そろって黒いな……））

「はっきりしろっつもの、ったく」

（（怖・・・））

＊

「なんだよ父さん、、、みんな呼んで並盛駅って」

「プレゼントだね！なんだろう！」

「よくきたみんな！！」

「父さん！！」

「さあ！お前らのアジトに行くぞー！！！！」

「はあ！？」

「アジト！？」

「わーお」

ゝ家光来る！ゝゝ（後書き）

アジト来ちゃったねw

ツナが作らせたらしいですが・・・そういう疑問は後々・・・
笑）w

読んでくださってありがとうございます
またよろしく願いますw

く未来来る！ーく（前書き）

更新遅れてすいませんっ！！（泣
宿題に追われてました・・・

レン「最後までためて宿題に追われる典型的なバカの小学生だ」

黒・・・（泣

・・・って、小学じゃないわー！！！

おもしろくないコントはおいといて・・・
どうぞーノノ

く未来来る！！く

「アジト！？」

「あれ・・・でも・・・」

「そうだ！ボンゴレのアジトは10年後のツナが作らせたはず・・・」

「お、俺だっけ！！！？？」

「そうツスよ！！」

「まあ、それは歩きながら話そう。」

そして家光はみんなを連れて歩き始めた。
向かった先は路地裏・・・

「そうか・・・お前らは未来に行ったんだな・・・アジトのことはなんて聞いたんだ？」

「いや・・・10年後の山本が『お前が作らせたんだぜっ』としか・・・」

「まああそこまで大きくするのはツナだろう。そして今あるのは仮の少し小さめのアジトだ。あと数年後には・・・ツナもアジトを作ろうとするだろうな！」

（俺ボスになる気ないのに・・・；；）

「この野球バカが！ちゃんと説明しやがれ！」

「俺そんなこといったのな！」

「しかし未来のアジトは極限すごかったぞー！」

「10代目のおかげっすね！今から作ってもいんじゃないっすか？」

（だからなる気ねーって・・・）

「さあついたぞー！」

気づいたらもう建物の中だった。

「「「わあ・・・」」」

「ここはツナが作らせたアジトの1階分ぐらいしかないぞ。」

「いいな〜！！未来はもっと広かったんだ！！私も未来行きたい〜
！！！」

今までしゃべらなかったリンが口を開いた。きっと我慢してみんなの話を聞いてたのだろう。

「あらら〜？？未来行きたいの？？じゃあランボさんが連れてってあげるもんね〜」

ランボが10年バズーカを頭の中から取り出した。

「ランボマてっ・・・!!!!」

ボフン!!!!!!

リンに直撃・・・

「ここには10年後のリンが来るのか・・・？」

レンがおそろおそろ言った。

「そうなるね・・・。」

煙が消えてきて人影が見えた。

「「「!!!!!!!!!!!!!!!!!!」」」

リンの姿を見てみんなみんな驚いた。

あまりにも美女だったから・・・

大人になったリンは落ち着いた顔つきで体系もすらりとしていた。

「あれ?どこ・・・?」

「あの・・・10年前・・・です。」

「うつそ！！わわっ！ツナくん！？うつわレンちっちえ！！！！」

「……………」

顔つきと性格が全く一致してないほど性格は変わってなかった．．

・

「……………！！！」

ぽたつと赤い滴がリンの腕から落ちた。

「けがしてるの！！！？？」

「ああ、ちよつとさっきまでドンパチしてたから．．．」

「じゃ．．．じゃあ．．．」

「１０年後に行っちゃったリンヤバいんじゃない．．．！！！」

「ああ！大丈夫！今アジトにいて手当してもらつとこるでこつち来たから！」

「よかつた！！」

「しっかし懐かしいな！！！この仮アジト！！あのね、ツナくんが．．．．．」

ボーン！！！！！！

「え」

「戻ってきたな。」

（なんか俺のこといいかけた……？）

「どうしたリン！？」

リンはうつむいて体が縮こまつてる状態だった。

それは……

「5分前にいた10年後世界での14歳のリン」

「え、ここどこ？」

「リ……ン？」

「うわっ！！！！ツナくん！！！？？」

「10年前のリンか！！！！！」

「やっぱ、ツナくんイケメンだあ！！！」

「は……」

「つか手に何持ってるの？」

「ああこれは・・・リンが怪我してたからいま手当てするところだ
つたんだが・・・」

「あゝ私10年後でもよく転んでたんだ！」

「いや・・・そんな軽い原因じゃあ・・・」

バンッ

部屋のドアが大きな音を立てて開いた。

「あ、雲雀さん!!」

「・・・っ!!!!!!」

リンの顔が一気に赤面した。

雲雀がリンをじーっとみた。

ボフン!!!!!!!!!!

というわけだ。

（やばいやばいやばいやばい！！！！なんだあの人！！あの
カッコよさは罪だ！！）

リンが真っ赤になりながら１０年前に戻ってきてても余韻に浸っていた。

「お楽しみのところ悪いが」

家光が言った。

「ここに何のために来たか・・・！！」

「あ？どうして？？」

「特訓だー！！！！！！！！」

く未来来る！ーく（後書き）

ふう・・・

読んでくださってありがとうございました！！

特訓ネタおおいな・・・（笑）

気にしないで下さい（笑）ww

では、次回もよろしく願いしますー！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6785u/>

歌が上手な転校生

2011年10月9日02時09分発行